

南海トラフ、備え強化を

岐阜市で防災シンポ、甚大被害に警鐘

「自分の命は自分で守る」強調

南海トラフ地震に備えた岐阜防災シンポジウム「防災・減災岐阜モデル構築に向けて」（岐阜新聞社・岐阜放送主催）が11日、岐阜市学園町のぎふ清流文化プラザで開かれ、参加者が災害への備えを考えた。

防災月間の9月に合わせて防災意識を高めてもらうと開き、約300人が参加した。シンポジウムは2部制で、名古屋大名誉教授で「あいち・なごや強靱化共創センター」の福和伸夫センター長による講演や、日本防災協会の岩井慶次郎支部長、防災士の資

格を持つタレントのかほなんさん、敷島産業の馬場美穂取締役、イビデンの館康哲防災推進プロジェクトリーダーらによるパネルディスカッションが行われた。

福和センター長は「必ず来る南海トラフ地震で日本を終わらせないために」を

テーマに講演。南海トラフ地震では家屋倒壊や焼失で約7万人、津波で約20万人の死者が出るとの想定を紹介し、「現在の防災意識や対策だけでは甚大な被害を避けられない」と警鐘を鳴らした。

また、二次的な大規模地震への対応を国の基本計画に盛り込む必要性や、現在の建物の耐震基準は大地震後の継続使用が考慮されていない課題などを指摘。さらに、震災時に対応できる行政の人員が不足する可能性にも触れ、「自分たちの命は自分で守ることを前提に生きていく必要がある」と強調した。

パネルディスカッションでは、登壇者らが防災経験や考え方を発表し、岐阜県で生き延びるために必要な備えについて意見を交わした。かほなんさんは過去のサバイバル経験を踏まえ、水の確保の重要性などをポイントにまとめて発表した。



福和伸夫名古屋大名誉教授の基調講演が行われた「岐阜防災シンポジウム」＝11日午後1時32分、岐阜市学園町、ぎふ清流文化プラザ（撮影・坂井萌香）